



Mission Statement

国連システム元国際公務員日本協会
(AFICS-JAPAN) は、

- 国連システムの活動に協力します
- 会員のために必要な情報収集を行い、最新情報を提供します
- 会員相互の意見交換や情報交換のための交流会合を開催します
- 国際機関で働く人材育成を支援します

◀ 記事一覧 ▶

- 第 8 回総会開催
2018 年を振り返り、2019 年に想うこと
- 現場からの報告：九島伸一氏
- 明石康特別顧問の挨拶概要
- SGH 支援プログラム活動状況
- 2019 年アンケート結果の報告
- 国連年金の相談会
- 第 48 回 FAFICS Council
- リタイアメント・ライフ：和気邦夫氏
- 会員短信：
 - 新入会員 1 名
 - JICA タジキスタン・ミッションとインタビュー記事：登丸求巳氏
 - 著書紹介：服部英二氏
- お知らせ：
 - 新役員選挙のお知らせ
 - 第 9 回年次総会の案内
 - 会費納入のお願い
 - 会員からの投稿募集

AFICS-JAPAN

Newsletter

第 12 号

2019 年 7 月 31 日発行

第 8 回 AFICS-J 総会開催

第 8 回年次総会は、3 月 25 日、国際文化会館で開催され、総会の冒頭で伊勢桃代会長から以下の挨拶があった。

2018 年を振り返り、2019 年に想うこと

AFICS-Japan は皆様のご支援のおかげで 8 年目を迎えることができました。当協会は過去 7 年間、組織の立ち上げから始まり、総会・執行委員会の恒常化、退職者の福利に関する講演会開催や情報の提供、そして国連のテーマに関する講演会の開催などの活動を行ってきました。又、年金制度などについて、日本で働く退職前の現職員の方がたにもお声をかけ、情報を提供する様努力をして参りました。

2018 年には、新しいプログラムとして、中学生・高校生を対象とした文科省によるスーパーグローバルハイスクール (SGH) 活動への協力を開始しました。すでに 10 名の当協会のメンバーが、文科省・筑波大学共催の SGH 高校生フォーラムの交流会にアドバイザーとして招かれ、活躍をしました。又、当協会メンバーは、AFICS-Japan として幾つかの中学や高校を訪問し、生徒たちにお話をする機会をもっております。

こうした当協会の活動を始めた主な理由の一つには、今、日本にとって重要課題である国際機関での日本人職員の減少に対応する増強の必要性とも関連しますが、日本での国際的人材の育成に少しでも貢献しようということと、若い世代の国連への理解と興味を深めることです。AFICS-Japan は国際経験豊かなメンバーによるいわゆるプロ集団であり、中学や高校という若い世代の国際能力の強化に特別な貢献が出来ると思います。将来には、先生方との交流も進めたく考えております。

又、こういった活動は持続的に行うことが必要であり、何年もの若い世代の為の活動の結果が、層の厚い国際的に活動の出来る人材の育成に繋がると考え、期待を寄せています。

当協会はその創設という時期が終わり、今後どう存続していくべきかを考える時に来ていると思います。2019年の執行委員会では、この課題を取り上げ何らかの提案をいたしたく思っております。その上で、皆様のご意見を広く頂きたいここにお願いいたします。

メンバーの皆さまのご健康を衷心よりお祈りいたします。(会長 伊勢桃代)

伊勢会長からの挨拶に続き、第1部総会議事、第2部総会プログラム「現場からの報告」講演ならびに挨拶、第3部懇親会が行われた。全体の進行と総会議長は山本和副会長がつとめた。

1部総会議事では、会員28名の出席と9名の委任状参加で総会定足数を満たし、以下の3議案の審議を行った。第1号議案2018年活動報告で、伊勢会長から活動報告がなされた。第2号議案2018年収支決算報告及び監査報告は、会計担当委員澤田良枝から2018年収支決算報告、久山純弘監査役から収支決算書および関連書類がすべて適正であるとの監査報告書が提出された。第3号議案2019年及び2020年事業計画案及び予算案は、伊勢会長から事業計画案の説明、澤田委員から予算案の説明がなされた。



最後に第4号議案で伊勢会長から AFICS-Japan 規約 Article II Membership について特別会員の追加の改正案の説明と提案がなされた。審議の結果、いずれの4議案も原案通り承認された。

総会議事に続く第2部プログラムでは、「現場からの報告」講演で、九島伸一氏が「Data, Information, Knowledge and Intelligence ～ここ数年の変化と未来～」というタイトルで講演、続いて明石康特別顧問が挨拶に立ち、最近の国連の活動に関する報道の減少や世界の孤立主義の潮流への懸念の中、AFICS-Japan の活動に対する期待を述べられた。（九島氏の講演要約と明石特別顧問の挨拶概要は後掲記事を参照）



第3部懇親会は、参加者の集合写真を撮影したのち、新しく特別会員になられた吉川元偉・前国連日本政府代表部特命全権大使の乾杯の音頭で懇親会は始まり、参加者は和やかな歓談の時を過ごした。

（出所：第8回 AFICS-J 総会報告書）

明石康特別顧問の挨拶概要

伊勢会長はじめ AFICS-Japan 執行委員会の地味ながら堅実な活動に敬意を表したい。



近年、国連に関する報道記事を見ることが少なくなった。全世界的にアンチ・グローバリズム、ポピュリズム、ナショナリズムが蔓延し、国連や国連システムに関する報道が少なくなっているように思える。世界的に深刻な難民問題が報道される時でさえ、国連の活動に関連付けて報道されることは少ない。難民救済や平和維持に関して国連が効果的に活動していないのではないか、という批判

の記事すら書かれなくなっている。

日本には、国連の常任理事国にもなれないという陰にこもった悔しさのようなものを背景とする国連無力論が常に存在する。しかし国連は 1945 年の創立以来、メンバー国数は 4 倍に増え、活動範囲も広がり、地味ながら着実な活動をしてきたという事実を無視することはできない。「国連はどうあるべきか？」という前向きで現実的な言論の展開がもっと必要だ。

トランプ大統領の米国に代表されるように内向き、孤立主義に陥る国が増えている昨今、1933 年に国際連盟を最初に脱退したという経験を持つ日本は、同じような孤立主義に陥る危険性をはらんでる。そのような中であって AFICS-Japan は常に新しいメンバーを受け入れつつ、国連と、日本の国際活動を関連付けるという活動を展開している。そしてこのような AFICS-Japan の活動の広がりが、アジアや世界がどうあるべきかという大きな課題につながっていくことを期待している。

現場からの報告

総会の議事終了に続いて、今回は「現場からの報告」の講演者として、2012 年まで国連に勤務された九島伸一氏をお願いした。国連での情報、データ、知識に係る仕事の経験をもとに、近年共通の理解もなく使われている人工知能（AI）、ビッグデータなどの言葉の説明とともに、国際社会が直面している情報社会の課題や未来についてお話しくださり、大変興味深い講演だった。以下に九島氏の講演要旨を掲載。（記録：佐藤純子執行委員）

Data, Information, Knowledge and Intelligence

～ここ数年の変化と未来～

九島伸一

今、何が起きているか？

昨今の情報分野の進歩の速さは目覚ましい。コンピュータにおいて「Data→Information→Knowledge→

九島伸一氏 プロフィール

早稲田大学理工学部物理学科卒業

米国 Case Western Reserve

University で Information and
Computer Sciences 修士号取得。

三井造船、IBM に勤務した後、1982 年
から 2012 年まで国連勤務。 UNECE
(国連欧州経済委員会) , WHO,

OHCHR, DPI で、Information や
ICT (Information and
Communication Technology) の
分野で働く。

著書に「情報」(幻冬舎、2015)、「知
識」(思水舎、2017)、「義政」(幻
冬舎、2018) がある。

Wisdom」という以前のモデルはもう通用しなくなった。今はむしろ、「Data→Information→Intelligence」というモデルが一般的になってきた。そしてデータの数が増大になり、IoT (Internet of Things : モノのインターネット)といわれるように身のまわりのあらゆるモノがインターネットを通じて繋がるようになってきた。約 190 億の IoT デバイスがあるといわれている現在、その膨大な量のデータをコンピュータというより AI (Artificial Intelligence : 人工知能) で処理するようになり、そこで完結する社会が出来上がってしまっている。

ビッグデータ : ビッグデータ(big data)という言葉をよく耳にすると思う。これは単に大量のデータということだけではなく、その特徴は、①データの想像を超えた多さ、②速い処理の需要、③データの不統一性、④データの不正確さにある。今、全体データ量の 90%は過去 2 年間に作られたデータだといわれている。そして来年になれば、またその時点で、過去 2 年間のデータ量が全体の 90%を占めてしまう。そしてこの膨大なデータが、ありとあらゆる場面で使われているのだ。人間にはビッグデータを処理することができ

ず、AI が使われているのだが、その過程でデータの統一性や信頼性が考慮されることはほとんどない。「必ずしも正しいとはいえないビッグデータ」から作られた「いい加減で危険性に満ちた情報」が、私たちの生活に影響を及ぼし始めている。

IoT : インターネットにつながっているデバイスである IoT の例としては、既に 2003 年から始まっているカーシェアリング (Times Car Plus) があげられる。駐車場に行きカードをかざすとセンサーが働き本人と予約時間を確認、ロックが解除される。また腕などの身体に装着する IoT 端末によって本人の位置確認をし、健康状態や運動

量を知ることができる。スマートフォンはもはや電話の機能をはるかに超え様々な機能を持つ IoT といえる。IoT の端末の数は、人間の数をはるかに超えている。情報検索のためにグーグルがあるように、IoT 専用の検索エンジン Shodan や Censys が既に存在する。特に Shodan は便利な検索エンジンだが、IoT デバイス自体のセキュリティがまだ万全とは言えない現状では、簡単に IoT を検索できることは、国家や会社にとって、セキュリティ上の問題とも言える。



AI : AI の定義に関しては諸説がある。例えば掃除機のルンバは、立派な AI だが（出来上がるまでは AI だと思われていたが）、出来上がってしまったらただの電化製品だと思われるようになってしまった。逆に、一般に AI といわれているが、実は電化製品にすぎないというものも数多くある。現在、AI というディープラーニング（Deep Learning : 深層学習）、つまり多層ニューラル

ネットワークによる機械学習法を適用しているシステムのことを指す場合が多い。ニューラル（neural : 神経）というが、人間のような神経を持つシステムというよりは人間の神経に触発された人工知能ということで、構造的にはあくまでもコンピュータだ。現在 AI が最も活躍している分野は健康・医療分野で、3 年ぐらい前までは IBM ワトソンがハーバード大学の医者より正しい医療診断をするといわれていたが、今やアリババの医療システムの方が優れているとも言われている。医療分野だけでなく、自動車、軍事、会社などの管理分野（例えば採用とか）にも AI の適用は浸透している。では AI はいったい何なのか、人間みたいに考えるのか？ マシンは常に論理的に機能し、人間は非論理的なものだ。非論理的に機能するマシンというものがありませんので、論理的なマシンを突き詰めていっても、本能のような非論理的な面を持つ人間と同じようなものにはなりえない。だからよく言われるように、進化した AI が人間を追い抜くということはないと思う。

いい事ばかりではない: Cathy O`Neil は著書 "Weapons of Math Destruction: Dark Side of Big Data" の中で、AI やビッグデータにおけるデータの質のいい加減さが故に起こる事故や悲劇、そしてどうやったらその被害から身を守ることができるかについて述べていて面白い。AI の弊害の例としては、3 年前マイクロソフトの開発したツイートする AI「Tay」がアメリカで開始直後に不適切な発言をするようになり、閉鎖に陥ったことが挙げられる。不思議なことに、同様のプログラムがすでに中国では「Xiaoice」という名で存在していたが、これに関しては「Tay」と同じ問題は起こらなかった。どうやら、アメリカと中国では、インターネットを取り巻く価値観や環境が全然違うことが影響しているようだ。日本の状況はアメリカに近い。例えば中国では子供の制服にチップを埋め込み、親

が常に子供の動向を遠隔で把握するデバイスがある。これは日本的な感覚で言えばプライバシーの侵害になり怖いことだが、中国人の親は子供の安全が守られるとポジティブな考え方をする。日本では絶対あり得ないことが中国では AI のシステムになりうる。例えば中国政府が「社会信用システム」の AI を持っていて、これによって人々を社会的にランク付けする。日本ではプライバシーなど色々なことに注意を払い、ブレーキを踏みながら AI の開発が行われているが、中国ではブレーキを踏むことなく開発に突っ走るのので、結果的に AI の進歩という点では、中国と日本の差は歴然としている。今や中国は、アメリカとともに、AI 開発をけん引している。（記録：佐藤純子執行委員）

SGH 支援プログラム活動状況

前号に報告以降の学校別アプローチとしては、2月20日に広島県立広島高等学校で「グローバルリーダーに求められる力」という講演テーマのもと、忍足謙朗会員が生徒との対話を通して講演した。また、6月25日に水戸市の常磐大学高等学校で教員研修の一環として、高瀬千賀子執行委員が教員80名にSDGsについて講演した。新たな進展としては、文部科学省がSGHの実績を踏まえて2019年度から始めたワールドワイドラーニング（WWL）コンソーシアム構築支援事業の企画評価会議に協力者の一人として高瀬委員が参加している。6月28日に文部科学省と筑波大学附属学校教育局主催のSGH・WWL・地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）合同連絡協議会が開催されたが、そのWWL連絡会に於いて井上健執行委員と高瀬委員がAFICS-JのSGH支援プログラムの説明を行った。また、合同情報交換会に於いて伊勢会長がAFICS-Jの紹介を行い、多くの参加者との対話の機会を得た。この合同協議会に先立ち、6月13日に、SGH支援プログラムのタスクフォースはWWL構築支援事業やグローバル型を含む文部科学省の新たな高等教育改革の取り組みについて文部科学省から説明を受け意見交換を行う機会を得た。今後は引き続き、学校別アプローチを要請ベースで対応しつつ、活動を広く広報するためにホームページの充実を図る。また、今年の高校生全国フォーラムにおいて、より充実した支援が行える様、文部科学省と意見交換の機会を持って行きたい。（記録：高瀬千賀子執行委員）

2019年アンケート結果の報告

4月15日にお送りしたアンケートへの回答の纏めをここにご報告いたします。ご参加下さいました方々に感謝いたします。回答率の低い結果とはなりましたが、AFICS-Jの活動につきましては高い期待を寄せて頂いているように感じられました。現在のAFICS-Jはいろいろな意味で限界はありますが、ご期待を反映する活動を行います様努力をいたす積りでございます。（会長 伊勢桃代）

1. 関心のあるテーマや情報についてお教え下さい。（複数回答可）

- **国連退職後の福利厚生について**：関心の高かった順に、国連年金制度が 13 人、国連年金に対する日本の課税が 13 人、定年後の国連健康保険が 5 人、海外資産に対する日本の課税が 5 人でした。
- **国連退職後の活動について**：社会貢献活動（人材育成、NGO、NPO など）が 11 人、健康維持と余暇の充実が 6 人、再就職が 3 人でした。
- **国連の活動について**：国連の機構改革などに 12 人、国連の開発協力・地球環境保全が 10 人、国連の平和活動が 7 人、国連と人権擁護・難民保護が 7 人でした。その他の関心のあるテーマや情報として、SDGs、移民・外国人労働問題、日本の拠出金とその内容について、と回答がありました。

2. 勉強会を含め、交流と意見交換のためにどのような機会を持つとよいと思いますか。

メンバー同士の懇親会が 11 人、国連幹部職員訪日の際の講演会が 11 人、勉強会（テーマの一例として、AFICS-J の NPO 法人化と回答あり）が 10 人、ホームリーブや日本出張中の日本人職員を囲んでの意見交換が 8 人、現役職員へのサポートが 6 人でした。

その他として、国連出向経験者等と情報交換を兼ねて、現場の状況や国連の対応状況等を理解してもらうという意見がありました。

3. 勉強会や懇親会の場所はどこが良いと思いますか。

これはメンバーのほとんどが東京都内に住んでいることから、東京都内を希望しています。具体的な場所として、国際文化会館や国連大学の名前があがりました。また、関西地域の希望者は 3 人でした。また、これらの会を夜ではなく、昼間に開いて欲しいという希望がありました。

4. スーパーグローバルハイスクール（SGH）支援活動へのご参加のお願い。

現在の 17 名に加え、新たにタスクフォースに参加希望を表明したメンバーは 3 名でした。

5. 第 8 回総会・現場からの報告・懇親会についてのご感想をお願いします（出席された方のみ）。

回答のほとんどが、とても良かった、おおむね良かった、でありました。感想として、現場を経験しているからこそ出る生の声を聞く機会は貴重だ、とありました。

6. 今後の総会における「現場からの報告」のテーマや講師についてのご提案があれば、お願いします。

定年後の楽しい過ごし方について、メディアで話題になる事柄についての意見交換、国連など多国間組織のこれからの役割、現在の危機に国連機関はどう対応しているか、国連改革の現状と SDGs への貢献、日本人の外交官で今の日本が関わるべき国際情勢と国益にかなう外交政策などの話が聞きたい。また、国連の高官になられた外交官の内輪話なども、もう数十年前に退官されていてもお話を聞きたい。なるべく現職員から変わりつつある国連システム関連テーマなどについての話を聞きたい、など沢山のご提案がありました。また、国連大学をいか

に活性化し、日本と国連の架け橋として活用するにはどうすれば良いかを考える、というご提案。AFICS アメリカなどの活動について知りたい、というご意見もありました。

7. 以上のほか、AFICS-Jの活動や運営について、ご意見のある方は自由にお書きください。

SGH のように中・高校生の早い時期から国際センスを身に着けさせるという目的は理解できるが、大学生も視野に入れた方が、国会協力分野での実務者の養成にもっと貢献できる、との意見がありました。また、何人かのメンバーから全員のリストを共有してもらいたい、という希望が述べられました。これに対しては、個人情報保護のため難しい点があり、今のところ、最終または主な所属先を載せたリストを、総会の報告書と一緒に送付していますが、メールアドレスも記載するかどうかについては検討中です。（記録：宮地節子執行委員）

国連年金に関する個人相談会

昨年 4 月に開催した国連年金に関する勉強会/相談会に引き続き、今年は個人相談会を 6 月 3 日、国連大学 2 階ライブラリー会議室で行い、AFICS-Japan の執行委員で年金を担当する永吉紀子氏が、希望者の相談に応じた。参加者は数名であったが、これまで疑問に思っていた点が理解でき、大変有益な機会となったとのコメントが寄せられた。

第 48 回 FAFICS Council

FAFICS Council (元国際公務員協力連合会)は 2019 年 7 月 15 日～17 日、ウィーンの IAEA 会議室で第 48 回年次総会が開催され、総会に先立って開催された役員会には 4 年間 FAFICS の副会長 (Vice President) を務めてきた佐藤純子執行委員が出席し、副会長として最後の役員会への出席となった。(FAFICS Council 報告書は次号に掲載予定。)

リタイアメント・ライフ

AFICS-Japan ニュースレターでは今号より会員の皆様の退職後のお話をご紹介した「リタイアメント・ライフ」という新コラムを設けました。第 1 回は和気邦夫氏 (UNICEF) に投稿をお願いいたしました。

いくつになっても冒険とロマンを求めよう ～ 和気邦夫

フライ・フィッシングを学ぶ：55 歳ごろだったと思うが、そろそろ退官後の準備をしなければならぬと思い、ジェントルマンのスポーツと言われていたフライ・フィッシングを始めることにした。経験もない私だったので、バーモント州のマンチエスターにあるオービスという釣り道具会社がやっているフライ・フィッシング学校に行き、2 日半基礎を教えて

もらい、その時バツェンキルという有名な川で毛針（フライ）をラインの先につけて投げながら小さなマス（マス）を2匹釣ったのが私の新しい趣味の始まりだった。歳をとって生活に少しゆとりが出てからは、年に少なくとも1度はモンタナ州、ワイオミング州、アイダホ州の川、ベリーズやバハマの海、それにカナダのプリティッシュ・コロンビア州やニュージーランドの川に釣りに出かけた。川に入って滑りやすい石の上を歩かなくてはならないので、76歳になった私には少し辛い趣味になってしまい、今年の1月にニュージーランドの南島にブラウントラウトを釣りに行ったが釣り6日目の最後の日には足がふらついて河原の石の上でバランスを崩してよく倒れたりした。魚を求めて上流に歩き続けるので帰りはヘトヘトになる。時には電流の通った牧場の柵を乗り越えたり、下をくぐったりしなくてはならない。そんなわけで今は同じビルにあるジムに通って足腰を鍛え80歳になるまでは頑張っただけでカナダやニュージーランドに大きなサケ、マス、スチールヘッドを釣りに行きたいと思っている。

子どもの頃に釣りをした思い出：私は戦後貧しく、テレビもビデオゲームもない時代に育ったので、伊豆に住んでいた時小学校が終わると釣竿を持って近所の狩野川に釣りに出かけて行った。ミミズを餌にフナを釣った少年時代の楽しい思い出が蘇ってくる。友人の家が川のそばにあって、ウケを川底にセットしてうなぎをとったり、箱メガネを使ってモリでカジカを捕まえたりした。釣りの楽しみは父親から息子に伝えるべきものと思っていたので、息子が大学生だった時はバハマやベリーズの海でボーンフィッシュをフライで釣るのに連れて行った。少年時代、少女時代に楽しかったことを考えてそれを定年後の趣味にするのも良いと思う。

釣りの楽しみ：今でも人生に冒険とロマンを求めている私にとっては、冷たい澄んだ川で熊や鹿、それに多くの鳥に出会いながら、自然豊かな奥地で大型のサケやマス（マス）を釣るのに、少し苦しいことはあっても大きな喜びを感じている。昨年数匹釣ったSteelheadという海で大きくなって帰ってきた魚は精悍で美しかった。また釣るのも難しかったがガイドが助けてくれるので釣果のある日も多い。自然を楽しむだけでなく、そこで出会う各地から来ている釣り



気狂いやガイドたちとの交流、ワインを飲みながらの釣り仲間たちとの夕食とおしゃべりも楽しい。

熊と遭遇したら：モンタナ州には熊がたくさんいてたまに釣り場に出てくる。カナダの川にもサケを捕まえに熊が川にやってくる。一番怖がられているのはグリズリー・ベアーで体も大きい。幸い私が出くわしたのはブラック・ベアーだけで、こちらは少しおとなしいようである。川の反対側に立ってこちらを見ていたが、何も知らない私はカメラを取り出して写真をとったりしていた。一緒にいたガイドは大声で近くにいる釣り人に熊が出た事を知らせていた。熊は泳げるし、

その気になれば向こう岸から我々を攻撃できたはずである。少しこちらを見てから興味を失った様子で去って行った。ただ熊が立ち上がるのは我々には危険な行動だそうで、何事もなく済んで良かったと後で思った。熊に出くわして死んだふりをするのは無意味な事、熊は木にも登れるので木に登るのは役立たない事、熊は早く走れるので逃げるのは危険な事など知ることになった。釣り竿を高くあげたりして自分を大きく見せながら、熊を直視してゆっくり後ずさりするのが賢明のようだった。また攻撃された時頭を抱えて小さくうずくまるのは、負傷を最小限にするのには少しは役立つとの事であった。

カナダではガイドの中に腰にペッパー・スプレーを付けている人もいた。風向によっては熊よりも我々にかかってしまうそうだ。頼りに思われたのはフィンランドからきたベアー・ドッグだ。賢い犬と一緒に釣りについて来てくれた。熊が出ると匂いでいち早く気がつき、勇敢に熊と戦ってくれるのだそうだ。アラスカでガイドが自動小銃を持っているビデオを見たことがある。拳銃で1発撃ったぐらいでは、急所に命中しないとかえって熊を怒らせることになってしまうのだろうか。鮭が川に豊富にいれば、熊は人間には見向きもしないそうである。食料がなくなるとキャンプをしている人間の食料を奪い取ることもあるそうだ。

鮭やマスを求めて：開高健によるとフライフィッシングは餌釣りやルアー釣りに比べて難しい技術と知識の必要な釣りだそうだ。イギリスの地主たちが暇に任せて考えた方法なようだ。また catch and release が海外では標準で魚を傷つけないようにして元気で川に離してやる。食べられないのが残念だが我々には他の釣り人にもチャンスを与える思いやりもある。しかし美しい自然環境にも人間にとって嫌な生物もいる。1月に行ったニュージーランドにはサンドフライという小さな虫がいた。マスは産卵に必要なタンパク質をとるために、人間の血を吸いにやってくる。虫除けを塗ったり、長袖のシャツを着たりして対応したが、時計をしていた左手のカフスやズボンの足元から侵入して私の腕や足を数カ所刺した。そこが腫れて痒みが長く残った。ベリーズの浅瀬の海には人を刺す小さなクラゲがいた。水中を見ながら毒クラゲを避けて浅瀬を歩くのも大変だった。美しいものの陰には少し怖いものが潜んでいるのを感じながら、生きている間は冒険とロマンの追求を続けて行こうと思っている。

会員短信

- **新入会員：**吉川元偉氏（前国連日本政府代表部特命全権大使）1名が、新たに会員となりました。2019年1月現在の会員数は87人です。
- **登丸求己氏 タジキスタン・ミッションとインタビュー記事の案内：**
以前玉川大学在職中に開発政策アドバイザーとしてタジキスタン大統領府に派遣されましたが、JICAはフォローアップ・プロジェクトを発掘するべく、今年2月あらためてタジキスタンにミッションを派遣しました。

昔の仲間であるタジク政府スタッフやプロジェクトスタッフと感動の再会を果たしました。そのとき受けた JICA のインタビュー記事が以下のウェブサイトに掲載されましたのでご案内します。

https://www.jica.go.jp/tajikistan/office/others/interview/20190319.html?fbclid=IwARotQsEr9S_vijmRTeJAfJGuXSm7T_NPBrwAZQSBic9XAOglr6vsYrnYa68#.XJ4V2_3k4gx.mailto

- **著書紹介：**メンバーによる著書の紹介です。

『転生する文明』 藤原書店（2019/5/25）、服部英二（元 UNESCO 事務総長顧問）。UNESCO から「文明間の対話」を発信した著者が、世界各地で感得した「体験的文明誌」。文明は死なず、生き物のように移動する。その道中、他と出会い、変貌し転生する。シルクロードの果たした役目、中でも海の道の役割りが浮き彫りにされる、この著により、読者はエッフェル塔がピラミッドの転生であり、ヴェルサイユの庭はバビロンのエデンの園に、ボロブドゥールは高野山に結ばれていることを知る。

お知らせ

- **新役員選挙のお知らせ**

AFICS-Japan は設立から 7 年を過ぎました。現在の AFICS-Japan の役員（執行委員 9 名、監査役 1 名）は 2020 年 3 月 31 日をもって任期終了となります。AFICS-Japan 規約 Article V. 1 の規定により、執行委員の任期は 2 年となっており、また Article IV. 4. b) は総会が執行委員を単純過半数で選出する、と定めています。新役員を選出する選挙については、本年 12 月頃にご案内いたします。多くの会員の皆様からの自薦・他薦による立候補をお願いいたします。

- **第9回年次総会のご案内：**

2020年3月23日（月）国際文化会館、午後5時半から開催予定。

- **2019 年会費納入のお願い：**

2019 年会費（5 千円）の納入をお願いします。

三菱東京 UFJ 銀行麹町支店（店番 616）普通預金

口座番号 0118643、

口座名義：アフィックス ジャパン ヤマモト カノウ

（AFICS-Japan 山本和）

☆前年度会費未納の方は、その分も合わせてお振込みください。

なお、年会費は年次総会受付でも納入できます。

- **会員からの投稿募集：**

AFICS-J の中で共有したい情報（会員自身の著書出版やリタイア後のお話など）の投稿をお待ちしております。その他にもニュースレターで取り上げてほしいテーマやご意見がありましたら、AFICS-J事務局までご連絡ください。